

5. 淡水魚類

(1) 調査概要

1) 調査方法

淡水魚類の調査は、文献、採集、目視、聞き取りで行った。何よりも採集調査が最も確実なものであるが、各調査員の長年の個人的なデータ蓄積が大変役立っている。それは目視や聞き取りに関しても同じである。熊本県における文献は大変少なかったのだが、1991年頃から建設省（現・国土交通省）による「河川水辺の国勢調査」が全国的に行われるようになり、それに伴って地方の河川の綿密な調査も増えてきた。それらの調査は、環境省の「生物多様性調査」とともに貴重な結果をもたらしてくれている。

2) 産地情報の採用基準

情報はすべて、文献情報があるものまたは標本があるもの、現地調査で確認できたものを採用することを基本とした。しかし、絶滅(E X)としているアカザやイトヨ、カマキリ(アユカケ)に関しては確実性のある現地での聞き取りを採用した部分もある。

3) 調査結果の概要

県内の淡水魚類(川で採れた汽水・海水魚も含む)は16目40科約160種(亜種)である。絶滅危惧I A類(C R)3種のうち、アリアケヒメシラウオは絶滅の可能性はあるが、今後の5年間の見直し期間中に再度の精査の機会を得て結論付けることにした。本種は筑後川と緑川の感潮域にのみ生息するとされていた。しかし、緑川においては近年、アリアケシラウオはわずかに採集されたが本種が確認されたことはない。

ニッポンバラタナゴは球磨川水系が天然分布の南限であったが、別亜種であるタイリクバラタナゴとの交雑で純粋のニッポンバラタナゴの保全が危ぶまれるものである。県北のいくらかの地域と阿蘇市の1地点では純粋なニッポンバラタナゴの生息が確認されていた(1998年頃)が、R D B 2009以降に県下数地点で新たに、DNA判定で本亜種純粋のニッポンバラタナゴの確認がされている。タイリクバラタナゴの生息域はここ約30年の間に南から北上して拡大している。過去にニッポンバラタナゴが確認されていても、現在、タイリクバラタナゴが侵入している水系においてはすでに雑種化しているものと考えられる。この2亜種間の交雑化の進む中においては、純粋なニッポンバラタナゴを外形から判別することは不可能である。2000年時点で、熊本県の2ヶ所を含めて全国に10ヶ所の純粋亜種生息地が確認されている(福原、2000)に過ぎなかった。その後20年経った現在、全国的には新たに生息地がいくつも確認されたと想像されるが、逆に、交雑化してしまった生息地も多いと予想される。

絶滅危惧I B類(E N)には4種を選定した。そのうち、ヤマノカミは、菊池川等では昔から普通に見られたが、1977年に2尾採集されたのが近年における唯一の確認で、生息が危ぶまれるものである。しかし、菊池川河口付近での生息の可能性はまだ期待がもてる。カジカについても似たようなことがいえる。氷川の下流部では約40年前は、ウツセミカジカ(カジカ小卵型;両側回遊型)が多く生息したが、今では激減している。しかし近年、菊池川水系の2支川の上流部でカジカ(カジカ大卵型;河川陸封型)が多く確認された。

4) R L 2014 との比較

R L 2014 では絶滅(E X)から準絶滅危惧(N T)までの35種と要注目種(A N)19種が選

定されたが、今回のRDB2019では絶滅(E X)から準絶滅危惧(N T)までの36種と要注目種(A N)15種が選定された。R L2014からの変更の詳細は、クルマサヨリに関しては、「近年減少」のために要注目種(A N)から準絶滅危惧(N T)に変更した。要注目種(A N)に選定されていたオオウナギは、天草下島での捕獲例が数件あったが、その後の確認例はない。しかし、引き続き要注目種(A N)としたが、要注目種(A N)に選定されていたハゼクチ、アシシロハゼ、マサゴハゼは、その後の調査等で普通に確認されたので、今回除外した。

タナゴ類のうち、特にヤリタナゴ、カネヒラ、カゼトゲタナゴの3種に関してはこれまで普通に見られていた場所でも個体数の減少が認められた。また、複数の地点において生息環境の劣化が認められるため、今回、準絶滅危惧(N T)から絶滅危惧II類(V U)に変更した。

RDB1998の頃と比べると、絶滅危惧種に加わったハゼ類の増加が目立つ。しかし、これは生息環境の悪化によるというわけではない。その主な要因は、当時建設省(現・国土交通省)の河川水辺の国勢調査をはじめとする各種の環境調査が近年多く行われるようになったことと、それに伴って採集技術も向上したため、県内では従来見られなかったあるいは極めて希少だった魚種が確認されるようになったことである。R L2014から新たに絶滅危惧II類(V U)に選定されたキセルハゼがその例で、本種の確認は県下では初めてのことであった。また、これらの魚種の中には南方系のハゼ類がいくらか見られるが、そのほとんどは天草諸島の黒潮の影響を受ける地域に見られる種である。

上で述べた南方系のハゼ類のうち、ミナミハゼとノボリハゼ、クチサケハゼの3種はRDB1998の発刊後、天草上・下島の黒潮の影響を受ける河川の河口部で、わずかな個体数ではあるが採集確認された。近年、大きく問題化してきた地球温暖化の影響かもしれないし、あるいは以前からあった死滅回遊魚の例であるかもしれない。これら3種はR L2004では準絶滅危惧としていたものであるが、採集個体数も僅少で、死滅回遊魚である可能性も大きいのでR L2014では「要注目種(A N)」に移した。また、今回もそのまま残した。

RDB1998で絶滅(E X)として記載したアカザは当時から熊本県下での生息の可能性を感じていた。その後、アカザに関する情報をいくつか入手した。2008年の夏には県境近くのK川で、情報提供者であるK社のS氏等の協力を得てアカザを採捕することができた。その後、同じ水系の熊本県下のM川やその付近の河川で採捕を試みたが、確認できなかった。たとえM川には生息しなくても、K川の生息環境を考えた場合、熊本県下での生息地は十分にあり得ると思われる。その後、県下での確認にはまだ至っていないので今回も絶滅(E X)としたが、今後も精査を続けるつもりである。

RDB1998では絶滅危惧I類(C R+E N)としたカジカ大卵型が、R L2004発行時点ではすでに菊池川水系で局所的に確認されていた。その後最近、菊池川水系の別の支川でも局所的に確認された。カジカ大卵型に関しては菊池川水系がおそらく南限河川だと思われる。本書では絶滅危惧I B類(E N)とした。

5) 今後の課題

昔から普通に生息していた種が近年になって減少している。主たる要因は、捕獲圧よりもむしろ生息環境の悪化である。それは、河川改修工事による河川のコンクリート化、農地の基盤整備による用水路のコンクリート化、家庭雑排水や農薬による水質悪化等によるものと思われる。さらに、オオクチバスやカダヤシ、ティラピア類などの無謀な放流によって、外来魚が種類、個体数共に増加している。外来種の増加は、在来種の生息に大きな

影響を及ぼしており、希少種の保全にとっても大きな課題である。

外来種に関しては、国外外来種のみならず、近年 国内外来種も大きな問題となってきた。生態系への影響の問題もそうだが、生息域もますます拡大している。例えば、ワタカは1995年に加勢川（野田堰下）ではじめて確認されたのだが、今では県北まで広く生息するようになった。また、イチモンジタナゴは1978年に球磨川水系百済木川でタイリクバラタナゴとほぼ同時にはじめて確認したのだが、その後 緑川水系加勢川・江津湖等でも生息が確認されるようになった。それからしばらくの期間、イチモンジタナゴが生息するのは九州では熊本県だけだと言われてきたが、最近、熊本県以外の九州北部でも確認されるようになった。江津湖においては最近、在来のタナゴ類は減少の一途をたどるのみである。純粋種はほとんどいなくなったと思われるニッポンバラタナゴ以外のタナゴ類もこの5~10年間でさえも激減した。特にセボシタビラは江津湖・加勢川・緑川水系ではまれに確認、菊池川においてはまったく確認されない状況になった。タナゴ類の保全には、その産卵母貝となる二枚貝の保全が重要である。熊本県で確認される二枚貝類はヌマガイとイシガイ、マツカサガイ（普通）、ニセマツカサガイ、カタハガイ（少ない）の5種、その他に県北でトンガリササノハガイとタガイ（僅少）である。

タナゴ類は、小規模な河川や農業用排水路等に生息していることが多く、人間活動による影響を受けやすい。昨今、生物多様性保全の観点から一級河川~準用河川に関しては行政も注意を払っている様子が認められるが、小規模な普通河川（法定外河川）は市町村に管理の義務がないため、川浚いや周辺の草刈り等、河川の維持管理において農業従事者に対して積極的に指導することがない。例えば、熊本市内某河川では、農家が重機を用いて過剰に浚渫したことにより二枚貝類が激減し、3種見られていたタナゴ類のうち2種が後に見られなくなった。タナゴ類においては、公共工事よりもむしろ、農業従事者による河川管理が脅威となっている。

アリアケギバチは菊池川においては十分に復活したと考えられる。小国、南小国と緑川では逆に減少かもしれない。今後精査の必要がある。緑川においては1996年にギギ（熊本県においては国内外来種）が1尾採捕された記録があるが、その後今日までに新たな捕獲事実はない。その昔アリアケギバチが分布した球磨川がギギに置換したのは、ここ数十年前のことである。緑川が同じ道筋をたどらないことを願いながら、今後も厳しく注目していく必要がある。

水中に生息する魚類には、生息環境の物理的な要因や水質の問題、生物的な要因などが複合的に関係しており、淡水魚の減少の要因を一つに求めることは困難である。また、生息域の水の質量は、上流側の森林などの自然環境や水質汚染源などの諸問題が広域的に関係している。したがって、魚類の保全対策では総合的な環境問題を考慮する必要がある。

大規模な開発事業はそれなりの環境配慮制度に従った基準のもとに、河川等は自然破壊から擁護されるようになった。フィールド調査に出る生物研究者たちは誰もが感じることであるが、「生物多様性」がうたわれる現代においてさえも河川等の自然破壊を引き起こしているのは、むしろ小規模な事業（小さな工事）であることが多い。

(2) 種の解説

絶滅(E X)から準絶滅危惧(N T)までの、それぞれのカテゴリーに位置づけた36種について、以下に解説する。

絶滅（EX）

アカザ

Liobagrus reini Hilgendorf

アカザ科

熊本県カテゴリー

絶滅（EX）

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

選定理由 絶滅

生息環境 水の比較的きれいな川の中流から上流下部の瀬の石の下や間

生息状況 かつて生息したと考えられるのは、小国町宮原、関川の上流、菊池川支川の岩野川や繁根木川・上内田川、坪井川、緑川など。夜間に活動することが多く、主に水生昆虫を食べる。5～6月の頃、瀬の礫の下に卵を産着する。

生存への脅威 農業使用、水質汚濁、河川改修

特記事項 宮崎県ではEX、福岡県ではEN、佐賀県ではCR+EN、大分県でVUとされている事実から、熊本県での生息の可能性も十分に考えられる。



撮影：藤井法行

イトヨ（降海型）

Gasterosteus aculeatus aculeatus (Linnaeus)

トゲウオ科

熊本県カテゴリー

絶滅（EX）

環境省カテゴリー

地域個体群（LP）

選定理由 絶滅

生息環境 2月下旬ころから河川に遡上し始め、小川や水田の溝に棲みつく

生息状況 坪井川の水路（八景水谷湧水地に続く）での確認の聞き取りがある。佐賀県のイトヨと同様、降海型だったと考えられる。「谷口育英氏は、10数年前、坪井川の水路で子どもたちに捕獲され水槽に飼育されていたイトヨを見たことがある」（1979）という。

生存への脅威 水質汚濁、海辺の改変等

特記事項 巣づくりや、「ジグザグダンス」といわれる求愛行動、「なわばり」が興味深く、教科書でも扱われることがある。

カマキリ（アユカケ）

Cottus kazika Jordan et Starks

カジカ科

熊本県カテゴリー

絶滅（EX）

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

選定理由 絶滅

生息環境 河川の中流域、下流域の流れの速い砂礫底に生息し、魚や水生昆虫、甲殻類などを食べる

生息状況 両側回遊型の魚類。太平洋側は神奈川以南、日本海側は秋田以南の本州、四国、九州に分布。昔は川辺川（相良村）や水俣川、球磨川水系（八代、吉尾）、久木野川などに生息していたという。氷川に生息しているとの聞き取りもあるが、確認できない。

生存への脅威 水質汚濁、河川改修

特記事項 日本固有種。熊本県での地方名はアユカケフグラ（混称）、セッチョ（混称）などが残っている。

絶滅危惧 I A 類 (CR)

ニッポンバラタナゴ

Rhodeus ocellatus kurumeus Jordan et Thompson コイ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I A 類 (CR)
環境省カテゴリー
絶滅危惧 I A 類 (CR)

選定理由 分布境界、雑交移行、近年減少

生息環境 閉鎖的な止水域を好み、産卵床であるヌマガイ、イシガイなどの淡水二枚貝が必要条件であるが、近年これらの貝の減少が目立つ

生息状況 濃尾平野、琵琶湖水系以西の本州、北部九州、熊本に分布したが、近年タイリクバラタナゴとの交雑が進み、全国的に純粋種の生息地が激減した。熊本県の少なくとも 2 ヶ所の個体群はアイソザイム分析等により純系のニッポンバラタナゴと判定されており、その後の DNA 分析でも県下数地点の生息地が判っている。

生存への脅威 外来種の侵入、交雑、河川改修、池沼の改修、水質汚濁

特記事項 本亜種とタイリクバラタナゴの交雑によって生じた雑種が増加し、両亜種や雑種の外形のみによる区別は困難。



撮影：林田創

アリアケシラウオ

Salanx ariakensis Kishinouye シラウオ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I A 類 (CR)
環境省カテゴリー
絶滅危惧 I A 類 (CR)

選定理由 全国局限、県内局限、分布境界

生息環境 河川の河口域から内湾の沿岸域にかけて生息

生息状況 国内では有明海のみで生息し、県内では緑川を中心にいくつかの河口域に限定される。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁

特記事項 有明海と朝鮮半島、中国北部に分布し、有明海と大陸との古地理学的な繋がりを考える上での要素の一つとなっている。近似種のシラウオ、アリアケヒメシラウオとは本種の上顎の先端が下顎よりも前に出ることによって区別される。



撮影：藤井法行

アリアケヒメシラウオ

Neosalanx reganius Wakiya et Takahashi シラウオ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I A 類 (CR)
環境省カテゴリー
絶滅危惧 I A 類 (CR)

選定理由 全国局限、県内局限、分布境界、特殊生息生育環境、近年減少、地域的孤立・希少

生息環境 大きな河川の感潮域といった極めて限られた場所に生息

生息状況 有明海にそそぐ筑後川と熊本県の緑川河口にのみ分布が限られる。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁

特記事項 日本固有種。緑川河口では近年全く採集されておらず、すでに絶滅した可能性がある。



熊本博物館所蔵

絶滅危惧 I B 類 (EN)

セボシタヒラ

Acheilognathus tabira nakamurae Arai, Fujikawa et Nagata

コイ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I B 類 (EN)
環境省カテゴリー
絶滅危惧 I A 類 (CR)

選定理由 分布境界、近年減少

生息環境 河川の中・下流域の用水路の穏やかな流れに生息、主たる産卵母貝はカタハガイ

生息状況 九州北西部と熊本県に分布し、緑川が南限。県内では菜切川（長洲町）、菊池川水系、尾田川（玉名市天水町）、加勢川・江津湖（熊本市）、緑川（甲佐町）などで生息が確認されている。しかし、近年減少が激しく、確認することがほとんど困難なところも多い。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項 熊本県での地方名はシビンタ、シビンチャ、ピンタ、セギリなど。ヤリタナゴに似ているが、本種の方はヒゲが短い。



撮影：林田創

ヤマノカミ

Trachidermus fasciatus Heckel

カジカ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I B 類 (EN)
環境省カテゴリー
絶滅危惧 I B 類 (EN)

選定理由 全国局限、県内局限、分布境界、近年減少

生息環境 干潟域と川を行き来する通し回遊魚で、稚魚は春から夏にかけて河川に遡上し、冬に降海する

生息状況 長崎県島原半島と熊本県宇土半島を除き、諫早湾奥部に注ぐ本明川から佐賀・福岡両県を経て、熊本県緑川にいたる多くの河川に生息するとみられているが、本県においては菊池川までと思われる。夜に活動し、主にエビやカニ類とその幼生を食べる。冬に河口や有明海湾奥部の干潟で産卵する。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁

特記事項 日本では有明海に注ぐ河川だけに分布し、典型的な大陸遺存種。全長 16cm。前鰓蓋骨に 4 つの棘があるのが特徴。熊本県での地方名はヤマノカミ、ヤマンカミ、ゴリ（混称）などがある。



撮影：林田創

カジカ（カジカ大卵型;河川陸封型）

Cottus pollux Günther

カジカ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I B 類 (EN)
環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

選定理由 県内局限、分布境界、近年減少

生息環境 川の上流側に分布し、山地の渓流域にまで生息、瀬の石礫底に多い

生息状況 本州と四国を中心に、九州の一部に分布し、熊本県にも生息する。南限は菊池川水系と考えられる。近年、菊池川の 2 支川の上流部で局地的に生息しているのを確認。50 年ほど以前までは杖立川（小国）でも生息していたというのは本種の大卵型であったと思われる。川辺川で昔たくさんいたというのも本種であったかも知れない。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、土砂流入

特記事項 日本固有種。



撮影：藤井法行

ウツセミカジカ（カジカ小卵型；両側回遊型）

熊本県カテゴリー
絶滅危惧ⅠB類（EN）
環境省カテゴリー
絶滅危惧ⅠB類（EN）

Cottus reinii Hilgendorf

カジカ科

選定理由 県内局限、分布境界、近年減少

生息環境 川の中・下流域を中心に生息、瀬の石礫底に多い

生息状況 本州と四国を中心に、九州の一部に分布し、熊本県にも生息する。南限は氷川と考えられる。かつては球磨川まで生息した。約40年前までは氷川下流部で多産していたが、近年激減した。白川では60年以上前にヤマノカミと同時にカジカも採集されている。川辺川（相良村）では昔、竹かごで捕り、みそ汁で食べるほどたくさん捕れていたと聞かすが、今では絶滅。



撮影：藤井法行

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、海辺の改変等

特記事項 日本固有種。2018年に球磨川下流部でカジカが複数個体採捕確認された（国交省調査）。カジカ中卵型に同定されたが、本書でいう氷川のウツセミカジカと同種と考えられる。今後注目していきたい。

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

ヤリタナゴ

熊本県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類（VU）
環境省カテゴリー
準絶滅危惧（NT）

Tanakia lanceolata (Temminck et Schlegel)

コイ科

選定理由 分布境界、近年減少

生息環境 河川の中・下流の緩流域とそれに続く用水路、清澄な湖沼に生息

生息状況 北海道と南九州を除く日本全国に分布。球磨川が南限。近年鹿児島県川内川などでも確認されているが、それは国内外来種だと思われる。河川の水環境の変化によって産卵床となる淡水二枚貝（マツカサガイ、イシガイ、ヌマガイなど）の減少や水草の減少などに伴って県内全域で減少傾向。



撮影：林田創

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項 県下の地方名はシビンチャ、ピンタ、エノハピンタ、エノハ、セギリなど。

カネヒラ

熊本県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類（VU）
環境省カテゴリー

Acheilognathus rhombeus (Temminck et Schlegel)

コイ科

選定理由 分布境界、近年減少

生息環境 河川下流の緩流域、それに続く用水路、平野部の湖沼に生息し、産卵床はマツカサガイ、イシガイ、ヌマガイなどの淡水二枚貝

生息状況 琵琶湖淀川水系以西の本州と九州北西部に分布し、緑川が南限。県内では菜切川（長洲町）、菊池川水系、尾田川（玉名市天水町）、加勢川・江津湖（熊本市）、矢形川（嘉島町）、緑川（甲佐町）などで生息が確認されている。



撮影：藤井法行

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項 タナゴ類は一般に春に産卵するものが多いが、本種の産卵期は9～11月。日本最大のタナゴで全長12cmにもなる。熊本県での地方名はピンタ、エノハピンタ、カクピンタ、タイシビンなど。

カゼトゲタナゴ

熊本県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類（VU）
環境省カテゴリー
絶滅危惧ⅠB類（EN）

Rhodeus atremius atremius (Jordan et Thompson) コイ科

選定理由 全国局限、分布境界、近年減少

生息環境 河川の下流の緩流域、用水路に生息し、産卵期は3~6月で、マツカサガイやイシガイ、ヌマガイなどに産卵

生息状況 九州北部、熊本県に分布し、球磨川が南限。県内では菜切川（長洲町）、菊池川水系、加勢川・江津湖・八景水谷（熊本市）、緑川（甲佐町）、球磨川水系などで生息が確認されている。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項 熊本県での地方名はヒラビン、ビンタ、シビンタ、シビンチャ、シビントンなど。



撮影：林田創

アリアケギバチ

熊本県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類（VU）
環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類（VU）

Pseudobagrus aurantiacus (Temminck et Schlegel) ギギ科

選定理由 全国局限、近年減少

生息環境 清澄で自然度が高い河川の上流末端部から中流域に生息

生息状況 九州西北部に局在し、分布域は狭い。昔は湯浦川、佐敷川と球磨川を結ぶ線より以北に不連続的に生息していた。球磨川では近年、国内外来種のギギに置き換わった。現在生息するのは緑川水系と杖立川、および菊池川水系の一部である。昼間は物陰などにひそみ、夜間や雨後に活動して水生昆虫などを捕食する。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、農薬使用

特記事項 菊池川水系においては40~50年位前に一時絶滅状態に陥ったが、約30年前に偶発的に1尾が捕獲されて以来少しずつ復活して、今では昔並みに増加した。



撮影：林田創

シラウオ

熊本県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類（VU）
環境省カテゴリー

Salangichthys microdon (Bleeker) シラウオ科

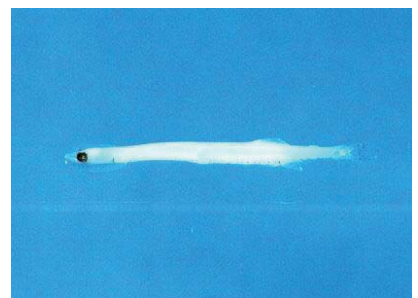
選定理由 県内局限、分布境界、近年減少

生息環境 河川の汽水域から内湾の沿岸域にかけて生息、初春の産卵期に河川を遡上する

生息状況 北海道から熊本県まで、また沿海州から朝鮮半島東岸の広い分布域を有する。熊本県が南限と思われる。アリアケシラウオやアリアケヒメシラウオと比べると分布域が広い。県内では有明海湾口部でも採集されているが、緑川を中心にいくつかの河口域に限定される。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁

特記事項 踊り食いや刺身、寿司、卵とじ、吸い物等で食され、水産上重要種となっている。



撮影：藤井法行

オヤニラミ

熊本県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

Coreoperca kawamebari (Temminck et Schlegel)

ケツギヨ科

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B 類 (EN)

選定理由 分布境界、近年減少

生息環境 本種の産卵や生育には、抽水植物が生育している水深 50cm 程で流れがゆるやかな環境が必要

生息状況 淀川・由良川以西の本州、四国北部、九州北部に分布。熊本県の菊池川は南限河川である。白川支川の黒川に昔から生息しているものは、江戸時代末頃に菊池川から移植されたものと考えられる。その他の移植による生息地は、江津湖や嘉島町、関川などがある。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、その他（水辺植物帯の消失）

特記事項 日本では唯一のスズキ目の純淡水魚で、進化生物学上貴重な種。



撮影：林田創

イドミミスハゼ

熊本県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

Luciogobius pallidus Regan

ハゼ科

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

選定理由 県内局限、分布境界、特殊生息生育環境、近年減少

生息環境 河口の地下水や伏流水のしみ出すような所の砂利中や海に近い地下水中に生息

生息状況 分布は一部を除いて西日本に集中している。県下では八代と天草上島のみで生息が確認されている。八代での確認(2004年10月)は半世紀ぶりであり、同時に数尾が採られている。また、天草上島では10年ぶりに1個体のみが確認(2004年10月)されており、減少傾向にあることが窺える。

生存への脅威 海辺の改変等、河川改修、水質汚濁

特記事項 眼はほとんど痕跡化しており、生時の体色はピンク色。今後の精査で県下の新たな生息地が確認できると思われる。本種は特殊な生息環境に棲むので、生息地となっている海岸や河口域では護岸工事などで簡単に絶滅に向かうおそれがある。



撮影：藤井法行

ムツゴロウ

熊本県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

Boleophthalmus pectinirostris (Linnaeus)

ハゼ科

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B 類 (EN)

選定理由 全国局限、県内局限、分布境界、近年減少

生息環境 河口域や湾奥の泥干潟、生息には泥濁質が重要な必要条件であり、砂底あるいは砂泥底には生息できない

生息状況 ビルマから台湾、中国、朝鮮半島の西岸、国内では有明海の湾奥部、八代海(不知火海)奥部の不知火干潟に分布。県下では緑川河口部、八代海(不知火海)奥部の不知火干潟に良好な生息地があるが、近年個体数が減少傾向にある。

生存への脅威 海辺の改変等、水質汚濁、海水域の変化、その他（濁質悪化）

特記事項 有明海、八代海(不知火海)の特産種で、かつて大陸沿岸との繋がりを示す種として重要。



撮影：藤井法行

クボハゼ

熊本県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

Gymnogobius scrobiculatus (Takagi)

ハゼ科

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類 (EN)

選定理由 近年減少

生息環境 河川の河口域～汽水域の砂泥～砂礫底に生息

生息状況 体長 4 cm。福井県～鹿児島出水の日本海・東シナ海沿岸、有明海、瀬戸内海、伊豆半島西岸～宮崎県日南の太平洋沿岸、鹿児島湾、屋久島に分布。ニホンスナモグリやアナジャコの生息孔を生息、産卵に利用していると考えられている。

生存への脅威 干潟の減少・消失、その他（底質悪化）

特記事項 日本固有種。



撮影：永田新悟

キセルハゼ

熊本県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

Gymnogobius cylindricus (Tomiyama)

ハゼ科

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類 (EN)

選定理由 近年減少

生息環境 河川の河口域～汽水域

生息状況 体長 6cm。愛知県木曾川～三重県揖斐川（伊勢湾）、瀬戸内海、有明海、博多湾、大分県、対馬、五島列島に分布。アナジャコ類の生息孔を利用するとされ、熊本県ではじめての確認例もそのような孔から出てきたところを採捕されたものである（荒尾市の干潟で、2012年）。

生存への脅威 干潟の減少・消失、その他（底質悪化）

特記事項 日本固有種。



撮影：永田新悟

エドハゼ

熊本県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

Gymnogobius macrognathos Bleeker

ハゼ科

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由 近年減少

生息環境 河川の河口域および前浜干潟に生息、生息地の底質は砂や砂泥

生息状況 体長 4.5cm。福岡県津屋崎～熊本県八代の九州沿岸、大阪湾、瀬戸内海、宮城県万石浦～徳島県吉野川の太平洋沿岸、宮崎県一ノ瀬川に分布し、国外では朝鮮半島西岸などに分布。産卵にはニホンスナモグリと思われる生息孔が利用されているようである。

生存への脅威 干潟の減少・消失、その他（底質悪化）

特記事項



撮影：永田新悟

準絶滅危惧 (NT)

スナヤツメ南方種

Lethenteron sp.S.

ヤツメウナギ科

熊本県カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由 分布境界、近年減少

生息環境 河川の中下流域の砂底中・砂泥底中に生息

生息状況 琉球列島と九州南部を除く全国の淡水域に生息。県下では菊池川水系、加勢川（熊本市）、御船川（御船町）、緑川（甲佐町）、万江川（人吉市）などで生息が確認されているが、生息域が限定されつつあり、個体数も激減。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、農業使用

特記事項 一般の魚類（有顎口類）と違って円口類（無顎口類）に属する。口は吸盤状で顎が無く、目の後方に7個の鰓孔があるので、普通ヤツメウナギと呼ばれる。アンモシーテスと呼ばれる幼生には眼が無い。



撮影：林田創

ニホンウナギ

Anguilla japonica Temminck et Schlegel

ウナギ科

熊本県カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類 (EN)

選定理由 近年減少

生息環境 一生を海域で過ごす個体と、海域から遡上してシラスウナギから成魚までの時期を汽水域や淡水域で過ごす個体が確認されている。淡水域では、河川下流部から上流部にまで定着し、農業用水路なども利用している。

生息状況 朝鮮半島南部・西部沿岸から中国、台湾、ベトナム北部、ルソン島北部までの範囲で見られる。国内では、太平洋側は北海道日高地方以南、日本海側は石狩川以南の各地に分布する。河川では、石垣のような隙間に好んで入るが、砂利や泥などの底質にもよく潜っている。

生存への脅威 河川改修、捕獲・採集

特記事項 熊本県内水面漁業調整規則（1995年・改正）第27条で「全長21センチメートル以下」のウナギの採捕が禁止されている。ウナギ資源の繁殖保護を図るためとして、熊本県内水面漁場管理委員会指示（2016年）で「全長21センチメートルを超えるウナギ」の採捕が禁止（10月から3月まで）されている。



撮影：林田創

エツ

Coilia nasus Temminck et Schlegel

カタクチイワシ科

熊本県カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類 (EN)

選定理由 全国局限、県内局限、分布境界、近年減少

生息環境 有明海湾奥部とそこに注ぐ河川の感潮域

生息状況 産卵期の5~7月、成魚が筑後川感潮域の上流部に遡上する。本明川、六角川、矢部川、緑川でもわずかに産卵するらしいとされる。

生存への脅威 河川改修、海辺の改変等、水質汚濁

特記事項 日本固有種。体は細長く側扁し、尾部が次第に細くなる。胸鰭の上部軟条6本が遊離して長く伸び、体側面は銀白色など、外見的にも大変珍しい魚。初夏の筑後川下流域のエツ料理は有名。福岡では平成4年から人工受精卵の放流事業あり。熊本県での漁業・食習慣はない。



撮影：藤井法行

アブラボテ

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Tanakia limbata (Temminck et Schlegel)

コイ科

選定理由 近年減少

生息環境 平野部を流れる細流や湧水域、用水路でオオカナダモなどの水草が繁茂しているような場所、主なる産卵母貝はマツカサガイ

生息状況 濃尾平野以西の本州、淡路島、四国の瀬戸内海側、高松川（阿久根市）までの九州に分布。かつては県下の平野部のほぼ全域に多く生息していた。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項 熊本県での地方名はシビンチャ、シビンチョ、シビンタ、ボテ、シビン、セギリなど。



撮影：林田創

カワヒガイ

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Sarcocheilichthys variegatus variegatus (Temminck et Schlegel)

コイ科

選定理由 分布境界、近年減少

生息環境 川の中流から下流域や灌漑用水路などの、わずかに流れがある水深1~3m程度の砂礫底を好み、イシガイやヌマガイなどの淡水二枚貝の体内に産卵

生息状況 愛知県豊川水系以西の濃尾平野、琵琶湖流入河川、京都盆地、山陽地方、九州北西部および奄岐島に分布。南限は球磨川。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項 琵琶湖固有亜種であるピワヒガイが球磨川（1985年）や緑川ダム（1993年）等で定着しており、それとの交雑も懸念される。



撮影：林田創

シロウオ

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

Leucopsarion petersii Hilgendorf

ハゼ科

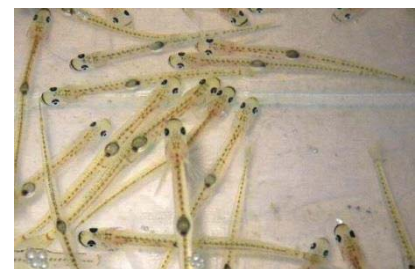
選定理由 近年減少

生息環境 仔魚から成魚までの生育期間は波の穏やかな沿岸域で過ごし、春の産卵期に河川感潮域まで遡上

生息状況 北海道南部から鹿児島県までの日本各地で見られ、国外では朝鮮半島南部に分布する。県内では主に天草地域や県南部に分布しており、春季、河口域で遡上個体を確認することができる。

生存への脅威 河川改修、海辺の改変等、埋め立て、水質汚濁、捕獲・採集、土砂流入

特記事項 天草地方で、遡上個体を四手網等で捕獲する漁は春の風物詩となっているが、漁獲量は減少傾向にある。



撮影：藤井法行

ミナミメダカ

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

Oryzias latipes (Temminck et Schlegel)

メダカ科

選定理由 近年減少

生息環境 河川中下流の緩流域、用水路

生息状況 県内の平野部に広く分布してはいるが、主な生息場所である用水路はコンクリート三面張りになっていることが多く、その生息環境は必ずしも好適であるとは言い難い。また、かつての生息地の多くでカダヤシの侵入が認められ、本種と置き換わりつつある。

生存への脅威 農地開発、河川改修、農薬使用、外来種の侵入

特記事項 2012年、それまで一種だった日本産のメダカが、キタノメダカとミナミメダカに分類された。熊本県に分布するのは、ミナミメダカのみである。最近、観賞用に多くの改良品種が販売されており、それらの遺棄されたものが野外で確認されている。



撮影：林田創

クルマサヨリ

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Hyporhamphus intermedius (Cantor)

サヨリ科

選定理由 近年減少

生息環境 主に河川下流部の汽水域から淡水域

生息状況 中国と朝鮮半島、国内では本州と九州に分布。県下では、菊池川水系、緑川水系、氷川水系などで確認されている。加勢川・江津湖（熊本市）では、群れが水面を泳ぐ様子を確認できるが、一度に見られるのは数個体から十個体程度で、個体数は多くない。

生存への脅威 河川改修、その他（沈水植物や抽水植物の減少）

特記事項 サヨリとは、下顎の長さや色などで容易に区別することができる。



撮影：清水稔

カワアナゴ

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー

Eleotris oxycephala Temminck et Schlegel

カワアナゴ科

選定理由 近年減少

生息環境 河川の下流域から汽水域にかけての泥底、砂底、礫底に生息。コンクリートブロックなどの隙間に潜んでいることが多い

生息状況 茨城県以南の本州太平洋側、四国、九州、屋久島、沖縄に分布。夜行性であることや物陰に隠れる性質のため人目に触れる機会は多くない。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁

特記事項 県内での地方名はナガフチドンコ、コモツキ、ヤカケ、ヤカギ、トラハゼ、ササイヲ、アブラメ、ドンコ（混称）など。



撮影：藤井法行

チチブモドキ

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー

Eleotris acanthopoma Bleeker

カワアナゴ科

選定理由 近年減少

生息環境 河口域や淡水の影響を受ける内湾に生息

生息状況 台湾島・西および南太平洋に分布。国内では千葉県から西表島・小笠原諸島に生息。県下では天草の限られた河川にのみ生息。生息状況の詳細については不明。

生存への脅威 海辺の改変等

特記事項 亜熱帯性ハゼ類。同属のカワアナゴに酷似する。熊本県下では極めて希少で、確認は天草地方でのみ。死滅回遊魚の可能性も僅かに残る。



撮影：藤井法行

タビラクチ

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
絶滅危惧 II 類 (VU)

Apocryptodon punctatus Tomiyama

ハゼ科

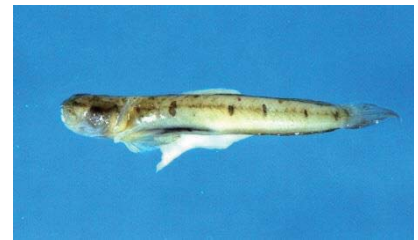
選定理由 近年減少

生息環境 河口干潟や前浜干潟の軟泥底に生息し、テッポウエビ類の生息孔内に見られる

生息状況 三重県から宮崎県の太平洋、山口県と長崎県の日本海・東シナ海、兵庫県から大分県の瀬戸内海、佐賀県から熊本県の有明海・八代海（不知火海）に面した地域に分布。

生存への脅威 海辺の改変等、水質汚濁、土砂流入

特記事項 日本固有種。自然状態に保たれた干潟の指標生物とされる。生活史は詳しくは知られていない。



撮影：藤井法行

タネハゼ

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー

Callogobius tanegasimae (Snyder)

ハゼ科

選定理由 県内局限

生息環境 河口域とその付近の海岸の砂泥底に生息。感潮域の最上流部にまで侵入する

生息状況 国内では紀伊半島から沖縄県の西表島までに分布。県下では天草の限られた河川にのみ生息。天草上島の小河川の河口域では、干潮で水が退いた砂泥部の石の下に潜んでいるのを採っている（2003年7月）。

生存への脅威 海辺の改変等、河川改修、水質汚濁

特記事項 亜熱帯性ハゼ類。熊本県下では極めて希少で、確認は天草地方でのみ。



撮影：藤井法行

ゴマハゼ

Pandaka sp.

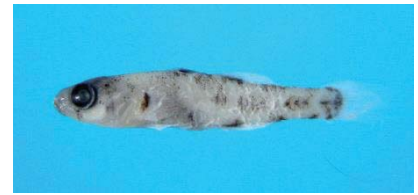
ハゼ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由 近年減少

生息環境 河口域や淡水の影響を受ける漁港等に生息

生息状況 三重県から屋久島、対馬、五島列島に分布。船溜りの隅、橋桁やトラポットのまわり、湿生植物の根元などで群れて浮遊する。浮遊して生活するので立体的な生息空間を必要とする。また、水温や塩分への選択性が高いので生息適地が限定される。



撮影：藤井法行

生存への脅威 海辺の改変等、水質汚濁、その他（水質汚染、廃棄物）

特記事項 日本固有種。全長 1.8cm のきわめて小型のハゼで、日本で最も小さい汽水・海水魚。寿命は約 1 年。

シロチチブ

Tridentiger nudicervicus Tomiyama

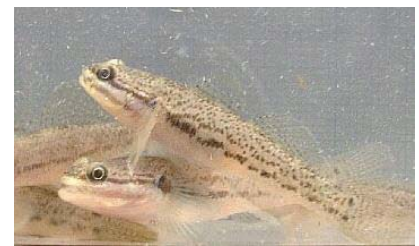
ハゼ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

選定理由 地域的孤立・希少

生息環境 低塩分の内湾の砂底に生息する汽水性の魚で、河川に侵入することはほとんどない

生息状況 体長 8cm。有明海、瀬戸内海、国外では朝鮮半島（西岸、南岸）、台湾などに分布。微妙な低塩分濃度の海域にしか生息しない汽水魚で、有明海の周辺海域や八代海（不知火海）では見られない。泥底ではなく、砂底や砂礫底の遠浅の浅海域に生息。砂泥の干潟でカキ殻の裏面に産卵する。



撮影：布田欣也

生存への脅威 干潟の減少・消失、水質汚濁、その他（底質悪化）

特記事項 過去、国内では有明海の特産種とされていた時期がある。

チクゼンハゼ

Gymnogobius uchidai (Takagi)

ハゼ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由 近年減少

生息環境 河口のきれいな砂地や砂の多い干潟に生息

生息状況 北海道から宮崎県にかけての太平洋、京都府から鹿児島県にかけての日本海・東シナ海、兵庫県から大分県にかけての瀬戸内海に面した地域に分布。

生存への脅威 埋め立て、河川改修、水質汚濁、土砂流入、その他（汚濁等）

特記事項 日本固有種。干潟の減少や河口域の汚濁等によって全国的に生息適地が減少傾向にある。自然状態に保たれた干潟の指標生物となり得る。

要注目種 (AN)

ウナギ科	オオウナギ	<i>Anguilla marmorata</i> Quoy et Gaimard
ドジョウ科	アリアケスジシマドジョウ (スジシマドジョウ小型種点小型)	<i>Cobitis kaibarai</i> Nakajima
ヨウジウオ科	ガンテンイシヨウジ	<i>Hippichthys (Parasyngnathus) penicillus</i> (Cantor)
ヨウジウオ科	テングヨウジ	<i>Microphis (Oostethus) brachyurus brachyurus</i> (Bleeker)
カワアナゴ科	オカメハゼ	<i>Eleotris melanosoma</i> Bleeker
ハゼ科	ワラスボ	<i>Odontamblyopus lacepedii</i> (Hamilton)
ハゼ科	チワラスボ	<i>Taenioides cirratus</i> (Blyth)
ハゼ科	ボウズハゼ	<i>Sicyopterus japonicus</i> (Tanaka)
ハゼ科	ミナミハゼ	<i>Awaous ocellaris</i> (Broussonet)
ハゼ科	ショウキハゼ	<i>Tridentiger barbatus</i> (Gunther)
ハゼ科	ノボリハゼ	<i>Oligolepis acutipennis</i> (Valenciennes)
ハゼ科	クチサケハゼ	<i>Oligolepis stomias</i> (Smith)
ハゼ科	ヒナハゼ	<i>Redigobius bikolanus</i> (Herre)
ハゼ科	ルリヨシノボリ	<i>Rhinogobius mizunoi</i> Suzuki, Shibukawa et Aizawa
ハゼ科	スミウキゴリ	<i>Gymnogobius petschiliensis</i> (Rendahl)

(3) 文献

1. 藤井法行 (1986) 移入魚. 土龍 MOGURA, 12:16-18. 熊本洞穴研究会.
2. 藤井法行 (2015) 阿蘇のセイジャンババ. いちご人参, (10):90-102.
3. 福原修一 (2000) 貝に卵をうむ魚. トンボ出版.
4. 乾隆帝・小山彰彦 (2014) 本州・四国・九州の河口干潟に生息するハゼ類. 魚類学雑誌, 61 (2): 105 - 109.
5. 川那部浩哉・水野信彦 (1989) 日本の淡水魚. 山と溪谷社.
6. 環境庁 (1982) 日本の重要な淡水魚 (南九州・沖縄版).
7. 環境庁 (1987) 河川調査報告書 九州・沖縄版 第3回自然環境保全基礎調査.
8. 環境庁 (1993) 第4回自然環境保全基礎調査. 動植物分布調査報告書 (淡水魚類).
9. 三宅琢也・中島淳・鬼倉徳雄・古丸明・河村功一 (2008) ミトコンドリア DNA と形態から見た九州地方におけるニッポンバラタナゴの分布の現状. 日本水産学会誌, 74 (6), 1060-1067.
10. 中島淳 (2017) 日本のドジョウ. 山と溪谷社.
11. 日本魚類学会自然保護委員会 (編) (2013) 見えない脅威” 国内外来魚” 一どう守る地域の生物多様性一. 東海大学出版会.
12. 佐藤正典 (編) (2000) 有明海の生きものたち. 海游舎.
13. 佐土哲也・松沢陽士 (2011) タナゴハンドブック. 文一総合出版.
14. 生物多様性センター (2002) 自然環境保全基礎調査. 生物多様性調査. 動物分布調査報告書 (淡水魚類). 環境省自然環境局.
15. 生物多様性センター (2010) 自然環境保全基礎調査. 動物分布調査. 日本の動物分布図集. 環境省自然環境局.
16. 瀬能宏 (監修) (2004) 決定版日本のハゼ. 平凡社.
17. 清水稔 (2017) 江津湖の魚類相～電気ショック船調査での確認を中心に～. 熊本博物館館報, (29): 53 - 64.